

氏名	赤川 智洋		
ヨミガナ	アカガワ トモヒロ		
学位の種類	博士（映像メディア学）		
学位記番号	映博第7号		
学位授与年月日	平成26年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉 物理的素材を用いた新しい表現を展示化する創作プロセス		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科） 桐山 孝司
（論文第1副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科） 藤幡 正樹
（副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科） 佐藤 雅彦
（副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科） 桂 英史
（副査）	東京大学	教授	廣瀬 通孝

（論文内容の要旨）

近年、メディアテクノロジーを用いた展示において、複数人のグループによって展示が制作されるケースが多くなっている。著者が携わっているアーティストグループ：アトリエオモヤも同様に、複数人のジャンルの異なる作家で構成されるグループである。筆者の特殊性は、所属するグループでの展示制作以外に、他のグループにエンジニアとして展示制作に参加することにある。筆者の興味は、アトリエオモヤで行う制作のプロセスと、他のグループで行うプロセスはが異なっているということである。また、筆者自身の心構えも違うのである。そこで、アトリエオモヤでおこなった展示プロジェクト「WATER LOGO '09」をとりあげ、展示ができるまでの制作のプロセスを精査し、展示制作を複数人によって協同で行う上で、集団の中で各個人がどのような構造になっているかを考察する。また、展示の制作過程における協同体のあり方について、様々な例をみることで、他グループでもスムーズにコミュニケーションをとり、展示制作を行っていくつかの指針を得る。すなわち、知識共有だけでなく、空間や体験の共有や、ツールの共通化が自分の所属する集団内だけでなく、外部協同体に参加する場合でも有効であることを示す。

（論文審査結果の要旨）

この論文は、ある現象を展示物として体験可能な形に実現する展示エンジニアリングについて論じたものである。展示エンジニアリングで行われている決定、配慮、技術の取り扱いなどはいまだ属人的な技能であり、一般的な解説はあっても、どうすれば高度な展示を作ることができるかという論説はほとんどなされてこなかった。特に化学技術を用いた展示では扱う範囲が広く、また技術の深い理解も必要になり、必然的に集団体制での開発の様相を帯びてくる。制作集団であるアトリエオモヤに属する著者は、超撥水性の布を用いたWATER LOGOの制作に関わった。その目的は、超撥水性の布の上で水が水滴となって転がる現象を、鑑賞者にとって興味深く、しかも繰り返し再現可能な展示物として実現することであった。本論文はそこで実際に行われた展示化のプロセスを、主にエンジニアリングの面から分析したものである。

論文の中心的部分は、WATER LOGOが比較的プリミティブであった2007年のバージョンから、筆者の参加を経て精度規模とも格段に高度になった2009年のバージョンへの進化を分析する形で論じられてい

る。この間にエンジニアリングの側から筆者が行ったことは、1) アイディアから技術的思考にブレークダウンする思考の整理、2) 理論的な可能性と現実を目指すべき目標を明確にする技術範囲の限定、3) システムの複雑さの管理とロールバックや別案の可能性を示す開発の段階化、である。特に1の思考の整理については、展示の動作をハードウェアに組み込んで固定化したものから、ソフトウェアで動作プログラムを管理する方式への変更が可能であることを示し、実際に実現した。さらにプログラム可能になった改良を活かすため、展示の動作をタイムライン上で管理する視覚化ツールを開発し、デザイナーがエンジニアの手助けなしに試行錯誤ができるようにした。それによって、水滴が一度に洗い流されるリセット動作を状態遷移に加えることができ、展示の表現の幅が大きく広がった。

このケーススタディをもとに、オープンソースの環境では展示エンジニアリングが共通基盤を持ちノウハウや人的交流がしやすくなること、その反面、物質や挙動についての共有がまだこれから必要であることなど、展示エンジニアリングの現状についても分析した。そのような成果を言説化し、展示エンジニアリングの公的な知識化に貢献したことから、本論文の審査結果を合格とした。